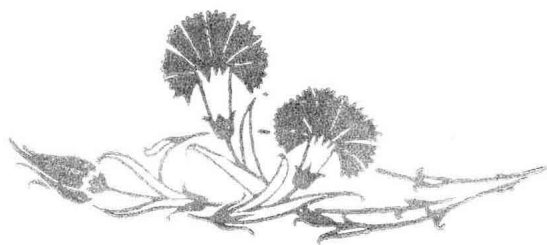


有島武郎集



河出書房

有島武郎集

現代文豪名作全集

第八回配本

昭和二十八年六月十五日
昭和二十八年六月二十日

初版印刷
初版發行

定價 二八〇圓
地方定價 二九〇圓



著者

有島武郎

編集者

本多秋五

發行者

河出孝雄

印刷者

鈴木一平

東京都千代田區神田小川町三ノ八
東京都文京區諏訪町五七

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河出書房

電話神田(25)二一七四番

本製田岸・刷印社會資合刷印屋鈴

切 而 納

目次

小さき者へ	三
星座	三
親子	二七
或る女	三六
年譜	四四
解説	本多秋五

有島武郎集

小きき者へ

へききき小

お前たちが大きくなつて、一人前の人間に育ち上つた時、——その時までお前たちのバ、は生きてゐるかゝらないか、それは分らない事だが——父の書き残したものを繰攢くわんげて見る機會があるだらうと思ふ。その時この小きき物もお前たちの眼の前に現はれ出るだらう。時はどん／＼移つて行く。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像も出来ない事だ。恐らく私が今こゝで、過ぎ去らうとする時代を喰くひ憐れんでゐるやうに、お前たちも私の古臭い心持を喰くひ憐れむのかも知れない。私はお前たちの爲めにさうあらん事を祈つてゐる。お前たちは遠慮なく私を踏躓ふみづにして、高い遠い所に私を乗り越えて進まなければ間違つてゐるのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にゐるか、或はゐたかといふ事實は、永久にお前たちに必要なものだと思ふのだ。お前たちがこの書き物を讀んで、私の思想の未熟で頑固なのを嗤わらふ間にも、私たちの愛はお前たちを暖め、慰め、勵まし、人生の可能性をお前たちの心に味覺あじさせずにおかないと私

は思つてゐる。だからこの書き物を私はお前たちにあてゝ書く。

お前たちは去年一人の、たつた一人のマ、を永久に失つてしまつた。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪はれてしまつたのだ。お前達の人生はそこで既に暗い。この間ある雑誌社が「私の母」といふ小さな感想をかけといつて來た時、私は何んの氣もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きてゐる事だ」と書いてのけた。而して私の萬年筆がそれを書き終へるか終へないに、私はすぐお前たちの事を思つた。私の心は惡事でも働いたやうに痛かつた。しかも事實は事實だ。私はその點で幸福だつた。お前たちは不幸だ。恢復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。

曉方あけがたの三時からゆるい陣痛ちんづが起り出して不安が家中に擴がつたのは今から思ふと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら、滅多にはないひどい吹雪の日だつた。市街を離れた川沿ひの一つ家はけし飛ぶ程揺れ動いて、窓硝子に吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲に閉ぢられた陽の光を二重に遮さつて、夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢心地に呻うき苦しんだ。私は一人の學生と一人の女中とに手傳はれながら、火を起したり、湯を沸かしたり、便を走らせたりした。産婆が雪で眞白になつてころげこんで來た時は、家中のものが思はずほつと

氣息をついて安堵したが、晝になつても晝過ぎになつても出産の様が見えないで、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える氣遣ひの色が見え出すと、私は全く慌てゝしまつてゐた。書齋に閉ぢ籠つて結果を待つてゐられなくなつた。私は産室に降りていつて、産婦の兩手をしっかりと握る役目をした。陣痛が起る度毎に産婆は叱るやうに産婦を勵まして、一分も早く産を終らせようとした。然し暫くの苦痛の後、産婦はすぐ又深い眠りに落ちてしまつた。軒さへかいて安々と何事も忘れたやうに見えた。産婆も、後から駆けつけてくれた醫者も、顔を見合はして吐息をつくばかりだつた。醫師は昏睡が来る度毎に何か非常の手段を用ゐるやうかと案じてゐるらしかつた。

晝過ぎになると戸外の吹雪は段々鎮まつていつて、濃い雪雲から漏れる薄日の光が、窓にたまつた雪に來てそつと戯れるまでになつた。然し産室の中の人々にはますます重い不安の雲が蔽ひ被さつた。醫師は醫師で、産婆は産婆で、私は私で、銘々の不安に捕はれてしまつた。その中で何等の危害をも感ぜぬらしく見えるのは、一番恐ろしい運命の淵に臨んでゐる産婦と胎兒だけだつた。二つの生命は昏々として死の方へ眠つて行つた。

丁度三時と思はしい時に——産氣がついてから十二時間目に——夕を催す光の中で、最後と思はしい激しい陣痛が起つた。肉の眼で恐ろしい夢でも見るやうに、産婦はかつと臉を閉いて、あてどもなく一所を睨みながら、苦しげと

いふより、恐ろしげに顔をゆがめた。而して私の上體を自分の胸の上にたくし込んで、背中を羽がいに抱きすくめた。若し私が産婦と同じ程度にいきんでゐなかつたら、産婦の腕は私の胸を押しつぶすだらうと思ふ程だつた。そこにある人々の心は思はず總立ちになつた。醫師と産婆は場所を忘れたやうに大きな聲で産婦を勵ました。

ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は顔を擧げて見た。産婆の膝許には血の氣のない嬰兒が仰向けに横たへられてゐた。産婆は毯でもつくやうにその胸をはげしく敲きながら、葡萄酒々々々といつてゐた。看護婦がそれを持つて來た。産婆は顔と言葉とでその酒を盥の中にあけると命じた。激しい芳香と同時に盥の湯は血のやうな色に變つた。嬰兒はその中に浸された。暫くしてかすかな産聲が氣息もつけない緊張の沈黙を破つて細く響いた。

大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその利那に忽如として現はれたのだ。

その時新たな母は私を見て弱々しくほゝゑんだ。私はそれを見ると何んといふ事なしに涙が眼がしらに滲み出て來た。それを私はお前たちに何んといつていひ現はすべきかを知らない。私の生命全體が涙を私の眼から搾り出したとでもいへばいいのか知らん。その時から生活の諸相が總て眼の前で變つてしまつた。

お前たちの中最初にこの世の光を見たものは、このやうにして世の光を見た。二番目も三番目も、生れやうに難易

の差こそあれ、父と母とに與へた不思議な印象に變りはない。かうして若い夫婦はつき／＼にお前たち三人の親となつた。

私はその頃心の中に色々な問題をあり餘る程持つてゐた。而して始終齟齬しながら何一つ自分を「満足」に近づけるやうな仕事をしてゐなかつた。何事も獨りで噛みしめて見る私の性質として、表面には十人並みな生活を生活してゐながら、私の心はやくともすると突き上げて來る不安にいら／＼させられた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生を惡んだ、何故自分の生活の旗色をもつと鮮明にしない中に結婚なぞをしたか。妻のある爲めに後ろに引きずつて行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故好んで腰につけたのか。何故二人の肉慾の結果を天からの賜物のやうに思はねばならぬのか。家庭の建立に費す努力と精力とを自分は他に用ふべきではなかつたのか。

私は自分の心の亂れからお前たちの母上を屢々泣かせたり淋しがらせたりした。またお前たちを没義道に取りあつかつた。お前達が少し執念く泣いたりいがんだりする聲を聞くと、私は何か殘虐な事をしないではゐられなかつた。原稿紙にでも向つてゐた時に、お前たちの母上が、小さな家事上の相談を持つて來たり、お前たちが泣き騒いだりしたりすると、私は思はず机をたゞいて立上つたりした。而して後ではたまらない淋しさに襲はれるのを知りぬいてゐ

ながら、激しい言葉を遣つたり、厳しい折檻をお前たちに加へたりした。

然し運命が私の我儘と無理解とを罰する時が來た。どうしてもお前達を子守に任せておけないで、毎晩お前たち三人を自分の枕許や、左右に臥らして、夜通し一人を寢かしつけたり、一人に牛乳を温めてあてがつたり、一人に小用をさせたりして、碌々熟睡する暇もなく愛の限りを盡したお前たちの母上が、四十一度といふ恐ろしい熱を出してどつと床についた時の驚きもさる事ではあるが、診察に來てくれた二人の醫師が口を揃へて、結核の徴候があるといつた時には、私は唯譯もなく青くなつてしまつた。検査の結果は醫師たちの鑑定を裏書きしてしまつた。而して四つと三つと二つとなるお前たちを残して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばならぬ體となつてしまつた。

私は日中の仕事を終ると飛んで家に歸つた。而してお前達の一人か二人を連れて病院に急いだ。私がその町に住まひ始めた頃働いてゐた克明な門徒の婆さんが病室の世話をしてゐた。その婆さんはお前たちの姿を見ると隠し隠し涙を拭いた。お前たちは母上を寢臺の上に見つけると飛んでいつてかじり附かうとした。結核症であるのをまだあかされてゐないお前たちの母上は、實を抱きかゝへるやうにお前たちをその胸に集めようとした。私はいゝ加減にあしらつてお前たちを寢臺に近づけないやうにしなければならなかつた。忠義をしようとしながら、周圍の人から極端な誤

解を受けて、それを辯解してならない事情に置かれた人の味ひさうな心持を幾度も味つた。それでも私はもう怒る勇氣はなかつた。引きはなすやうにしてお前たちを母上から遠ざけて歸路につく時には、大抵街燈の光が淡く道路を照してゐた。玄關を這入ると雇人だけが留守してゐた。彼等は二三人もある癖に、残しておいた赤坊のおしめを代へようともしなかつた。氣持ち悪げに泣き叫ぶ赤坊の股の下はよくぐしょ濡れになつてゐた。

お前たちは不思議に他人になつてこない子供たちだつた。やう／＼お前たちを寢かしつけてから私はそつと書齋に這入つて調べ物をした。體は疲れて頭は興奮してゐた。仕事をすまして寢付かうとする十一時前後になると、神經の過敏になつたお前たちは、夢などを見ておびえながら眼をさますのだつた。變方になるとお前たちの一人は乳を求めて泣き出した。それにおこされると私の眼はもう朝まで閉ぢなかつた。朝飯を食ふと私は赤い眼をしながら、堅い心のやうなものゝ出來た頭を抱へて仕事をする所に出懸けた。

北國には冬が見る／＼逼つて來た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寢臺の上に起きかへつて窓の外を眺めてゐたが、私の顔を見ると、早く退院がしたいといひ出した。窓の外の楓があんなになつたのを見ると心細いといふのだ。なるほど入院したてには燃えるやうに枝を飾つてゐたその葉が一枚も残らず散りつくして、花壇の菊も霜に傷められて、萎れる時でもないのに萎れてゐた。私はこの

寂しさを毎日見せておくだけでもいけないと思つた。然し母上の本當の心持はそんな所にはなかつて、お前たちから一刻も離れてはゐられなくなつてゐたのだ。

今日はいよ／＼退院するといふ日は、霰の降る、寒い風のびゅう／＼と吹く悪い日だつたから、私は思ひ止らせようとして、仕事をすまずとすぐ病院に行つて見た。然し病室はからつぽで、例の婆さんが、貰つたものやら、座蒲團やら、茶器やらを部屋の隅でござ／＼と始末してゐた。急いで家に歸つて見ると、お前たちはもう母上のまはりに集まつて嬉しさうに騒いでゐた。私はそれを見ると涙がこぼれた。

知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつてゐたのだ。五人の親子はどん／＼押寄せて來る寒さの前に、小さく固まつて身を護らうとする雜草の株のやうに、互により添つて暖みを分か合はうとしてゐたのだ。然し北國の寒さは私たち五人の暖みでは間に合はない、程寒かつた。私は一人の病人と頑固な前たちとを勞はりながら旅雁のやうに南を指して進めなければならなくなつた。

それは初雪のどん／＼降りしきる夜の事だつた、お前たち三人を生んで育て／＼くれた土地を後にして旅に上つたのは。忘れる事の出來ないいくつかの顔は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに名残りを惜しんだ。陰鬱な津輕海峡の海の色も後ろになつた。東京まで附いて來てくれた一人の學生は、お前たちの中の一歩小さい者を、母のや

うに終夜抱き通してゐてくれた。そんな事を書けば限りがない。兎も角私たちは幸に怪我もなく、二日の物憂い旅の後、晩秋の東京に着いた。

今までゐた處とちがつて、東京には澤山の親類や兄弟がゐて、私たちの爲めに深い同情を寄せてくれた。それは私にどれ程の力だつたらう。お前たちの母上は程なくK海岸にさゝやかな貸別荘を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取つて、そこから見舞ひに通つた。一時は病勢が非常に衰へたやうに見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘に行つて日向ぼつこをして楽しく二三時間を過ごすまでになつた。

どういふ積りで運命がそんな小康を私たちに與へたのかそれは分らない。然し彼はどんな事があつても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかつた。その年が暮れに迫つた頃お前達の母上は假初の風邪からぐんぐん悪い方へ向いて行つた。而してお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病氣の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病児は病児で私を暫くも手放さうとはしなかつた。お前達の母上からは私の無沙汰を責めて來た。私は遂に倒れた。病児と枕を並べて、今まで経験した事のない高熱の爲めに呻き苦しまねばならなかつた。私の仕事？私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまつた。それでも私はもう私を悔まうとはしなかつた。お前たちの爲めに最後まで戦はうとする熱意が病熱よりも高く私の胸の中で燃

えてゐるのみだつた。

正月早々悲劇の絶頂が到來した。お前たちの母上は自分の病氣の眞相を明かされねばならぬ破目になつた。そのむづかしい役目を勤めてくれた醫師が歸つて後の、お前たちの母上の顔を見た私の記憶は一生涯私を驅り立てるだらう。眞蒼な清々しい顔をして枕についたまゝ母上には冷たい覺悟を微笑に云はして靜かに私を見た。そこには死に對する *calmness* と共に お前たちに對する根強い執着がまざまざと刻まれてゐた。それは物凄くさへあつた。私は凄慘な感じに打たれて思はず眼を伏せてしまつた。

愈々K海岸の病院に入院する日が來た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに逢はない覺悟の臍を堅めてゐた。二度とは着ないと思はれる——而して實際着なかつた——嗜着を着て座を立つた母上は内外の母親の眼の前でさめぐと泣き崩れた。女ながらに氣性の勝れて強いお前たちの母上は、私と二人だけゐる場合でも泣顔などとは見せた事がないといつてもいい位だつたのに、その時の涙は拭くあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙はお前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまつた。大空を互る雲の一片となつてゐるか、谷河の水の一滴となつてゐるか、大洋の泡の一つとなつてゐるか、又は思ひがけない人の涙堂に貯へられてゐるか、それは知らない。然しその熱い涙は兎も角もお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のある所に来ると、お前たちの中熱病の豫後にある一人は、足の立たない爲めに下女に背負はれて、——一人はよち／＼と歩いて、——一番末の子は母上を苦しめ過ぎるだらうといふ祖父母たちの心遣ひから連れて來られなかつた——母上を見送りに出て來てゐた。お前たちの頭はない驚きの眼は、大きな自動車にばかり向けられてゐた。お前たちの母上は淋しくそれを見やつてゐた。自動車が動き出すとお前達は女中に勧められて兵隊のやうに舉手の禮をした。母上は笑つて軽く頭を下げてゐた。お前たちは母上がその瞬間から永久にお前たちを離れてしまふとは思はなかつたらう。不幸なものたちよ。

それからお前たちの母上が最後の氣息を引きとるまでの一年と七箇月の間、私たちの間には烈しい戦が闘はれた。母上は死に對して最上の態度を取る爲めに、お前たちに最大の愛を遺すために、私を加減なしに理解する爲めに、私は母上を病魔から救ふ爲めに、自分に迫る運命を男らしく肩に擔ひ上げるために、お前たちは不思議な運命から自分を解放するために、身にふさばない境遇の中に自分をはめ込むために、闘つた。血まぶれになつて闘つたといつていい。私も母上もお前たちも幾度彈丸を受け、刀創を受け、倒れ、起き上り、又倒れたらう。

お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日に死が殺到した。死が總てを壓倒した。而して死が總てを救つた。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分はお前たちに與へられた一節だつた。若しこの書き物を讀む時があつたら、同時に母上の遺書も讀んで見るがいい。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに會はない決心を盡さなかつた。それは病菌をお前たちに傳へるのを恐れたばかりではない。又お前たちを見る事によつて自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に残酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び／＼て行かなければならぬ靈魂に少しでも大きな傷を残す事を恐れたのだ。幼兒に死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時はお前たちをお前たちにつけて楽しく一日を過ごさして貰ひたい。さうお前たちの母上は書いてゐる。

「子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大きさに似て」とも詠じてゐる。

母上が亡くなつた時、お前たちは丁度信州の山の上にゐた。若しお前たちの母上の臨終にあはせなかつたら一生恨みに思ふだらうとさへ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上に強ひて頼んで、お前たちを山から歸らせなかつた私をお前たちが残酷だと思ふ時があるかも知れない。今十一時半だ。この書き物を草してゐる部屋の隣りにお前たちは枕を列べて寝てゐるのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の隣になつたら私のした事を、即ち母上のさせようとした事を價高く見る時が來るだらう。

私はこの間にどんな道を通つて來たらう。お前たちの母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷はずに通つて行けばいいのを知るやうになつた。私は嘗て一つの創作の中に妻を犠牲にする決心をした一人の男の事を書いた。事實に於てお前たちの母上は私の爲めに犠牲になつてくれた。私のやうに持ち合はした力の使ひやうを知らなかつた人間はない。私の周囲のものは私を一個の小心な、魯鈍な、仕事の出来ない、憐れむべき男と見る外を知らなかつた。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底さして見ようとしてくれるものはなかつた。それをお前たちの母上は成就してくれた。私は自分の弱さに力を感じ始めた。私は仕事の出来ない所に仕事を見出した。大膽になれない所に大膽を見出した。鋭敏でない所に鋭敏を見出した。言葉を換へていへば、私は鋭敏に自分の魯鈍を見貫き、大膽に自分の小心を認め、勞役して自分の無能力を體驗した。私はこの力を以て己れを鞭ち他を生きる事が出来るやうに思ふ。お前たちが私の過去を眺めて見るやうな事があつたら、私も無駄には生きたなかつたのを知つて喜んでくれるだらう。

雨などが降りくらしして悵鬱な気分が家の中に漲る日などに、どうかするとお前たちの一人が黙つて私の書齋に這入つて来る。而して一言バ、といったぎりで、私の膝によりかゝつたまゝしくくと泣き出してしまふ。あゝ何がお前たちの頭はない眼に涙を要求するのだ。不幸なものたち

よ。お前たちが謂れもない悲しみにくづれるのを見るに増して、此の代を淋しく思はせるものはない。またお前たちが元氣よく私に朝の挨拶をしてから、母上の寫眞の前に駆けて行つて、「マ、ちゃん御機嫌よう」と快活に叫ぶ瞬間は、私の心の底までぐざと刮り通す瞬間はない。私はその時、ぎよつとして無劫の世界を眼前に見る。

世の中の人には私の述懐を馬鹿々々しいと思ふに違ひない。何故なら妻の死とはそこにもこゝにも倦きはてる程夥しくある事柄の一つに過ぎないからだ。そんな事を重大視する程世の中の人には閑散でない。それは確かにさうだ。然しそれにもかゝらず、私といはず、お前たちも行く／＼は母上の死を何物にも代へがたく悲しく口惜しいものと思ふ時が来るのだ。世の中の人が無頓着だといつてそれを恥ぢてはならない。それは恥づべきことぢやない。私たちはそのありがちの事柄の中からも人生の淋しさに深くぶつかつて見ることが出来る。小さなことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ。

何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑ふにつけ、面白がるにつけ、淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。

然しこの悲しみがお前たちと私とにどれ程の強みであるかをお前たちはまだ知るまい。私たちはこの損失のお蔭で生活に一段と深入りしたのだ。私共の根はいくらかでも大地に延びたのだ。人生を生きる以上人生に深入りしないも

のは災ひである。

同時に私たちは自分の悲しみにばかり浸つてゐてはならない。お前たちの母上は亡くなるまで、金銭の累ひからは自由だつた。飲みたい薬は何んでも飲む事が出来た。食ひたい食物は何んでも食ふ事が出来た。私たちは偶然な社會組織の結果からこんな特權ならざる特權を享樂した。お前たちの或るものはかすかながらU氏一家の模様を覚えてゐるだらう。死んだ細君から結核を傳へられたU氏があの理智的な性情を有しながら、天理教を信じて、その御祈禱で病氣を癒さうとしたその心持を考へると、私はたまらなくなる。薬がきくものか祈禱がきくものかそれは知らない。然しU氏は醫者の薬が飲みたかつたのだ。然しそれが出来なかつたのだ。U氏は毎目下血しながら役所に通つた。ハンケチを巻き通しな喉からは穢腹れた聲しか出なかつた。働けば病氣が重なる事は知れ切つてゐた。それを知りながらU氏は御祈禱を頼みにして、老母と二人の子供との生活を續けるために、勇ましく飽くまで働いた。而して病氣が重つてから、なけなしの金を出して貰つた古賀液の注射は、田舎の醫師の不注意から靜脈を外れて、激烈な熱を引起した。而してU氏は無資産の老母と幼兒とを後に残してその爲めに斃れてしまつた。その人たちは私たちの隣りに住んでゐたのだ。何んといふ運命の皮肉だ。お前たちは母上の死を思ひ出すと共に、U氏を思ひ出すことを忘れてはならない。而してこの恐ろしい溝を埋める工夫をしなけれ

ばならない。お前たちの母上の死はお前たちの愛をそこま

で擴げさすに十分だと思ふから私はいふのだ。

十分人世は淋しい。私たちは唯さういつて澄ましてゐる事が出来るだらうか。お前達と私とは、血を味つた獸のやうに、愛を味つた。行かう、而して出来るだけ私たちの周圍を淋しさから救ふために働かう。私はお前たちを愛した。而して永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいふのではない。お前たちを愛する事を教へてくれたお前たちに私の要求するものは、たゞ私の感謝を受取つて貰ひたいといふ事だけだ。お前たちが一人前に育ち上つた時、私は死んでゐるかも知れない。一生懸命に働いてゐるかも知れない。老衰して物の役に立たないやうになつてゐるかも知れない。然し何れの場合にしろ、お前たちの助けなければならぬものは私ではない。お前たちの若々しい力は既に下り坂に向はうとする私などに煩はされてゐてはならない。斃れた親を喰ひ盡して力を貯へる獅子の子のやうに、力強く勇ましく私を振り捨てゝ人生に乗り出して行くがいふ。

今時計は夜中を過ぎて一時十五分を指してゐる。しんと靜まつた夜の沈黙の中にお前たちの平和な寢息だけが幽かにこの部屋に聞こえて来る。私の眼の前にはお前たちの叔母が母上にとて贈られた薔薇の花が寫眞の前に置かれてゐる。それにつけて思ひ出すのは私があゝの寫眞を撮つてやつた時だ。その時お前たちの中に一番年だけたものが母上の

胎に宿つてゐた。母上は自分でも分らない不思議な望みと恐れとで始終心をなやましてゐた。その頃の母上は殊に美しかつた。希臘の母の眞似だといつて、部屋の中にいゝ肖像を飾つてゐた。その中にはミネルバの像や、ゲーテや、クロムウエルや、ナイティンゲール女史やの肖像があつた。その少女じみた野心をその時の私は軽い皮肉の心で觀てゐたが、今から思ふとたゞ笑ひ捨てゝしまふことはどうしても出来ない。私がお前たちの母上の寫眞を撮つてやらうといつたら、思ふ存分化粧をして一番の晴着を着て、私の二階の書齋に這入つて來た。私は寧ろ驚いてその姿を眺めた。母上は淋しく笑つて私にいつた。産は女の出陣だ。い子を生むか死ぬか、そのどつちかだ。だから死際の装ひをしたのだ。——その時も私は心なく笑つてしまつた。然し、今はそれも笑つてはゐられない。

深夜の沈黙は私を嚴肅にする。私の前には机を隔てゝお前たちの母上が坐つてゐるやうにさへ思ふ。その母上の愛は遺書にあるやうにお前たちを護らずにはゐないだらう。よく眠れ。不可思議な時といふものゝ作用にお前たちを打任してよく眠れ。さうして明日は昨日よりも大きく賢くなつて、寢床の中から跳り出して來い。私は私の役目をなし遂げる事に全力を盡すだらう。私の一生が如何に失敗であらうとも、又私が如何なる誘惑に打負けようとも、お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し得ないだけの事はする。屹度する。お前たちは私の斃れた所から新しく歩み出

さねばならないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばならぬかは、かすかながらにもお前達は私の足跡から探し出す事が出来るだらう。

小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。

・行け。勇んで。小さき者よ。

(一九一八年一月 新潮所載)

星座

その日も、明けがたまでは雨になるらしく見えた空が、爽やかな秋の朝の光となつてゐた。

咳の出ない時は仰向けに寝てゐるのがよかつた。さうしたまゝで清逸は首だけを腰高窓の方に少しふり向けて見た。夜のひきあけに、いつもの通り咳がたてこんで出たので、眠られぬまゝに廁に立つた。その歸りに空模様を見ようとして、一枚繰つた戸がそのまゝになつてゐるので、三尺程の幅だけ障子が黄色く光つてゐた。それが部屋を餘計小暗く感じさせた。

隣りの部屋は戸を開け放つて戸外のやうに明るいのだらう。さうでなければ柿江も西山もあんな騒々しい聲を立てる筈がない。早起きの西山は朝寢の柿江をとく／＼起してしまつたらしい。二人は慌てゝ學校に出る支度をしてゐるらしいのに、口だけは悠々とゆうべの議論の續きらしいことを饒舌つてゐる。やがて、

「おい、その馬鹿馬をこつちに投げてくれ」といふ西山の聲が殊更際立つて聞こえて來た。清逸の心はかすかに微笑んだ。

ゆうべ、柿江のはいてゐるぼろ袴に眼をつけて、袴ほど今の世に無意味なものはない。袴をはいてゐると白痴の馬に乗つてゐると同じで、腰から下は自分のものではないやうな氣がする。袴ではない馬鹿馬だと西山がいつたのを、清逸は思ひ出したのだ。

隣りのドアがけたゝましく開いたと思ふと清逸のドアがノックされた。

「星野、今日はどうだ。まだ起きられんのか」

さう廊下から不必要に大きな聲を立てたのは西山だつた。清逸は聞こえる聞こえないもかまはずに、障子を見守つたまゝ「うん」と答へたゞけだつた。朝から熱があるらしい、氣分はどうしても引き立たなかつた。その上清逸にはよく考へて見ねばならぬ事が多かつた。

けれども西山達の足音が玄關の方に遠ざからうとする、清逸は浅い物足らなさを覺えた。それは清逸には奇怪にさへ思はれることだつた。で、自分を強ひるやうにその物足らない氣分を打ち消すために、先程から明るい障子に羽根を休めてゐる蠅に強く視線を集めようとした。その瞬間に然し清逸は西山を呼びとめなければならぬ用事を思ひついた。それは西山を呼びとめなければならぬ程の用事であつたのだらうか。兎に角清逸は大きな聲で西山を呼

んでしまつた。彼は自分の喉から老人のやうにしはがれた虚ろな聲の放たれるのを苦々しく聞いた。

「さあ園の奴まだゐたかな」

さう西山は大きな聲で獨語しながら、けたましい音をたて、階子段を昇るけはひがしたが、又ころがり落ちるやうに二階から降りて來た。

「星野、園はゐたからさういつておいたぞ」

その聲は玄關の方から叫ばれた。傍若無人に何か柿江と笑ひ合ふ聲がしたと思ふと、野心家西山と、空想家柿江とはもつれあつてもう往來に出てゐるらしかつた。

清逸の心はこの些やかな攪拌の後に元どほり沈んで行つた。一度聞耳を立てるために天井に向けた顔をまた障子の方に向けなほした。

十月の始めだ。けれども札幌では十分朝寒といつていゝ時節になつた。清逸は綿の重い掛蒲團を頸の所にたくし上げて、軽い暖を二つ三つした。冷え切つた空氣が障子の所で少し暖まるのだらう、かの一匹の蠅はそこで静かに動いてゐた。黄色く光る障子を背景にして、黒子のやうに黒く點ぜられたその蠅は、六本の脚の微細な動きかたまでも清逸の眼に射込んだ。一番前の兩脚と、一番後ろの兩脚とをかたみがはりに拜むやうにすり合せて、それで頭を撫でたり、羽根をつくりつたりする動作を根氣よく續けては、何んの必要があつてか、素早くその位置を二三寸づゝ上の方に移した。乾いたかすかな音が、その度毎に清逸の耳をか

すめて、蠅の元ゐた位置に眞白く光る像が残つた。それが不思議にも清逸の注意を牽きつけたのだ。戸外では生活の營みが色々な物音を立てゝゐるのに、清逸の部屋の中は秋らしく物靜かだつた。清逸は自分の心の澄むのを部屋の空氣に感ずるやうに思つた。

矢張りおぬいさんは園に頼むが一番いい、柿江は駄目だ。西山でも悪くはないが、あのがさつさはおぬいさんにはふさはしくない。そればかりでなく西山は馴れたやうで油斷のならない所がある。あの男はかうと思ひこむと事情も顧みないで實行に移る質だ。人からは放漫と思はれながら、いざとなると大掴みながらに急所を押へることを知つてゐる。おぬいさんにどんな心を動かして行くかも知れない。……

蠅が素早く居所をかへた。

俺はおぬいさんを要する譯ではない。おぬいさんは度々俺に眼を與へた。おぬいさんは異性に眼を與へることなどは知らない。それだから平氣で度々俺に眼を與へたのだ。

おぬいさんの眼は、俺を見る時、少し上氣した皮膚の中から大きくつや／＼しく輝いて、或る羞みを感じながらも俺から離れようとはしない。心の底からの信頼を信じて下さいとその眼は云つてゐる。眼はおぬいさんを裏切つてゐる。おぬいさんは何にも知らないのだ。

蠅がまた動いた。軽い音……

おぬいさんのその眼のいふ所を心に氣づかせるのは俺に